

## 第2回 浪士組から新選組

文：幕末維新ミュージアム霊山歴史館 副館長 木村幸比古



幕府権威は安政の大獄で失われ、各地から志士らが京都に集まり、幕政を批判するとともに勤王運動を展開した。出羽国の志士清河八郎は、江戸で「虎尾の会」を結成し、幕臣の山岡鉄太郎ら勤王派有志15名が集まった。ちょうどその頃、京都で志士が幕府に加担した者を血祭りする「天誅」が横行していた。清河が幕府に進言したのは、志士を取り締まる方策として、江戸の浪人で浪士組を組織し、京都で将軍警固や治安維持にあたらせる内容だった。だが清河は密かに、京都で勤王運動を起こす画策をしていた。

清河は浪士組の件を土佐藩士間崎哲馬に頼み、間崎から山内容堂に進言した。容堂は公武合体を推進していたことから、連日登城し越前の松平春嶽に説いた。幕府は将軍上洛警固のため浪士組募集を決定したが、決定に歩兵奉行小栗忠順は、旗本の子で組織すべきと異議を唱え、講武所師範高橋泥舟もこの意見に賛同した。しかし、清河らの考えで身分を問わず、志さえあれば応募することができ、浪士組募集50人に対し234人も集まり、300人組ともよばれた。この中には、近藤勇、土方歳三、芹沢鴨らが加わり、文久3年（1863）2月23日、京都に入り壬生村に宿泊した。ここで清河は主だった者を新徳寺に集め、尊王攘夷をこの地で行うと熱弁、宣言文を御所内学習院に届けた。28日、浪士組に達しがあり、特別に禁裏御所への拝観が許された。物見遊山の拝観は慎むようとのことわりがついていた。

幕府は清河の勤王の策謀を知り、浪士組をいったん江戸に戻すよう命じた。しかし、近藤、芹沢らは京都残留を決め、京都守護職お預かり壬生浪士組と名乗り、将軍警固や市中巡邏、志士らの取り締まりの任務をこなした。近藤は京都の心境を「事あらばわれも都の村人となりてやすめん皇御心」と詠んだ。

文久3年8月18日の政変の際、浪士組は会津藩の要請を受け出動した。この働きを認められ武家伝奏より新選組の隊名をもらい、幕府の一翼を担う組織となった。

その後、池田屋事件、禁門の変で武名をあげ、慶応3年（1867）6月10日、新選組は幕府直参となり、近藤は将軍御目見となった。